

第5節 中原4号墳出土の玉

戸根 比呂子

はじめに

中原4号墳からは、器種、素材、数量とも豊富な玉が出土している。このうちの多くが原位置を保っている可能性が高く、出土状況も含めて良好な一括資料と捉えることができる。

本稿では、出土状況を今一度整理するとともに、その用途についても検討する。また、それぞれの器種の特徴を概観することで、時期的位置づけを明らかにする。さらに、当該時期の東海地方における墳墓出土の玉との比較検討により組成の特徴を明らかにし、その背景や意義についても、若干の考察を試みることにしたい。

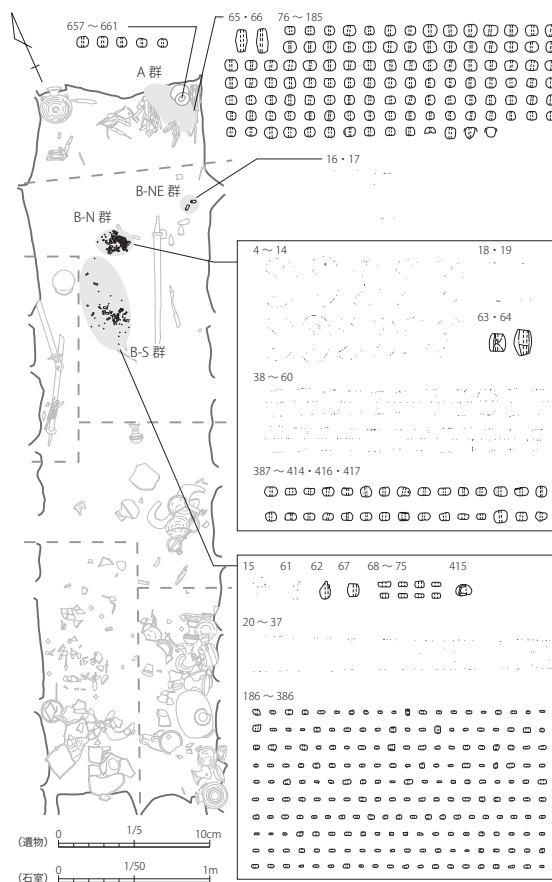
なお、時期区分は大賀（2002b）（註1）に、地域区分は戸根（2008）（註2）に準拠する。

1 出土状況と用途

中原4号墳からは、勾玉、管玉、切子玉、棗玉、白玉、丸玉、小玉（註3）の各種の玉が出土している（第12表）。遺物の出土地点は、A～Fの6群のうち、A群及びB群より出土している（第177図）。ここではまず、出土地点、出土状況を概観する。その上で、各群の玉が一連の資料として捉えうるのか検討したい。玉は、1点で目的を完結することもあるが、装身具という用途を考える以上は基本的には孔を紐で繋ぎ、1つの「環」として用いることが想定される。ここでは、出土状況を示すそれぞれの「群」について、その外見や法量の共通性から本来は一括性のある「環」を形成しうるか否かを検証した上で、用途についても検討してみたい。

A群の玉は、石室内の北東隅に集中している。土製の

丸玉と棗玉で、半径30～40cmの範囲に集中している。一部の丸玉は須恵器内から出土しているが、須恵器内外で外見上の相違は特に認められない。また第181図のとおり、径8.0mm前後の資料と6.5mm前後の資料とに区分されるが、その中で須恵器内の資料が特別な分布域を示すわけでもなく、法量にも指向性が認められない。こうしたことから、須恵器の内外で資料を峻別することはできず、一部の玉を意図的に須恵器内に収納したというよりは、据えられている須恵器の上から玉が撒かれ、そのまま原状が保たれている、あるいは、須恵器外の玉は須恵器から零れ落ちたもの、と考えられる。この状況が、副葬当初のものであるか、二次的に移動されたものであるかは判別しがたいが、仮に原位置を保っているとすれば、須恵器上で実際に装身の状態であったとは考え難く、いわゆる祭祀的な用途で用いられたものと考えられる。

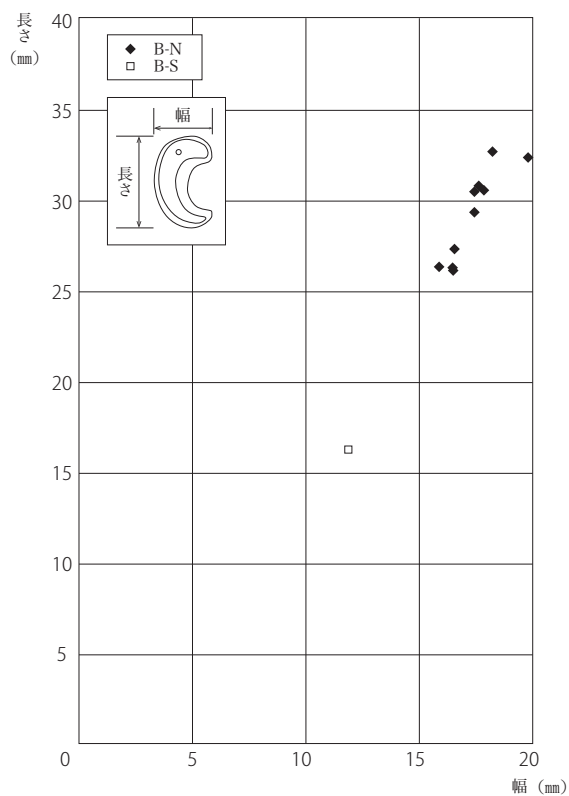


第177図 中原4号墳玉類出土状況図

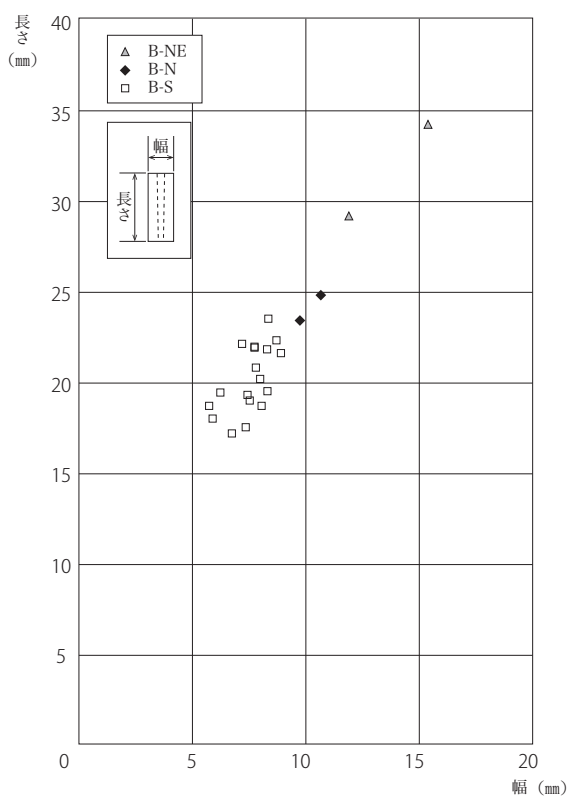
第12表 中原4号墳出土の玉

器種	材質	A群	B-NE群	B-N群	B-S群	計
勾玉	瑪瑙			11	1	12
管玉	碧玉		2		18	22
切子玉	水晶			23	1	24
棗玉	翡翠				1	1
	琥珀			2	1	3
	土	2				2
白玉	滑石				7	7
	碧玉				1	1
丸玉*	土	115				115
小玉	ガラス			30	202	232
計		117	2	68	232	419

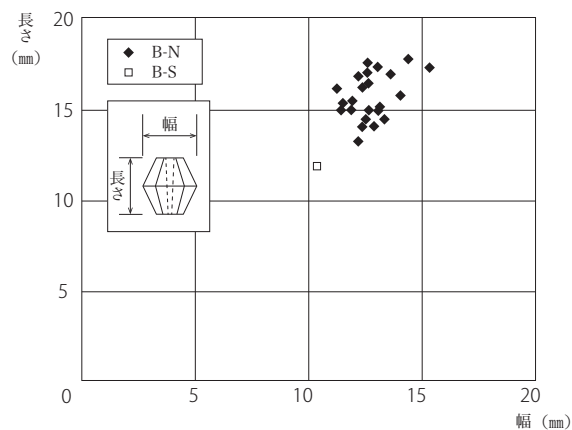
※ 須恵器短頸壺（645）内から出土した5点を含む。



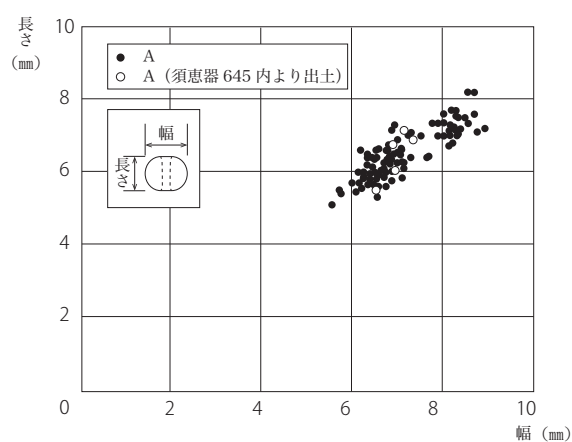
第178図 瑪瑙製勾玉の法量



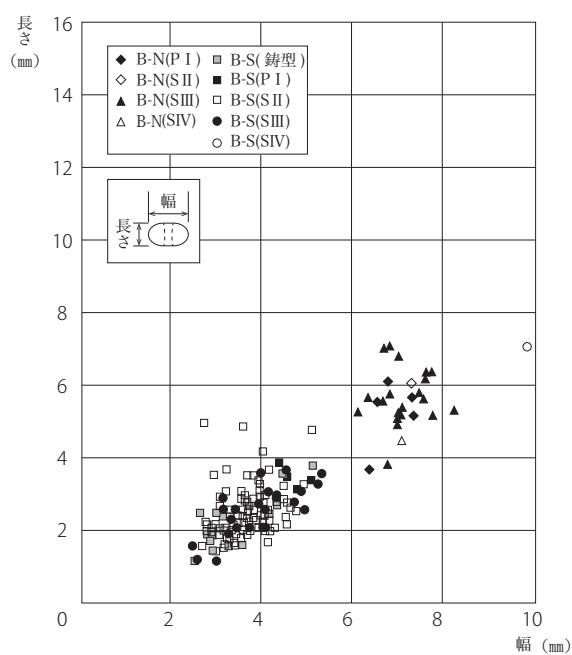
第179図 碧玉製管玉の法量



第180図 水晶製切子玉の法量



第181図 土製丸玉の法量



第182図 ガラス製小玉の法量

B群の玉は、さらに3つの小群に分かれる。その出土位置から、北東の一群をB-NE群、北側の一群をB-N群、南側の一群をB-S群、とする。B-NE群は、碧玉製管玉2点のみである。碧玉製管玉はB-N群、B-S群からも出土しており、いずれかの群の玉が移動した可能性もあるが、第179図のとおり、法量的に明らかに大きく、他の2群とは別の環を形成する可能性がある。ただし、2点という数から、実際に環状にして使用したとは考え難く、耳飾やその他の装具であったと推定される。

B-N群は、瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、琥珀製棗玉、ガラス製小玉であり、特に勾玉、切子玉の数量の多さが目立つ。半径約20cmの範囲に集中している。B-S群は、瑪瑙製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、琥珀製及び翡翠製棗玉、滑石製白玉、ガラス製小玉であるが、B-N群に比して勾玉、切子玉の数量はわずかに1点ずつで、管玉の数量の多さが目立つ。南北に約60cmの範囲に広がり、やや散在している。この2群は器種が重複するので、それぞれ2つの環として区分しうるのか、器種ごとに確認していく。

瑪瑙製勾玉はB-N群で11点、B-S群で1点出土している。B-S群の1点は、第178図のとおり12点の中でも際立って小さく、B-N群の11点とは別の環を形成すると捉えうる。碧玉製管玉は、色調に若干の違いがあるほか、B-S群はやや小さく、B-N群は一回り大きく（第179図）、各々の群で法量の指向性を持った、別々の環を形成すると考えられる。水晶製切子玉は、B-N群で23点、B-S群で1点出土している。いずれも形状、法量が類似しているが、強いて言えばB-S群はB-N群よりも若干小さいことを指摘できる（第180図）。棗玉についても、同じ素材の琥珀製については、B-S群、B-N群とで区別し難く、元は一連のものであった可能性もあるが、B-S群の1点は一回り小さい。ガラス製小玉は、材質については次項でまとめるが、B-N群に大型の資料、B-S群に小型の資料と、法量に一定のまとまりが認められる（第182図）。

以上により、若干の移動があった可能性も残すものの、器種が重複するものは、B-N群が大型、B-S群が小型という傾向が共通して確認され、それぞれの群ごとに少なくとも2つの環を形成していたことがわかる。これにより、出土状況が環ごとの現位置を保っている可能性が高いと推定される。さらに、各々の群の玉をつなげると、

B-N群は約74cm、B-S群は約91cmの長さになる（註4）ことから、手や足環ではなく、頭、胸、腰などの装身具として想定される。さらに、石室の広さを考慮すると、頭を北にしたと推定され、B-N群は首飾り（あるいは頭飾り）、B-S群は腰飾り（あるいは首飾り）、という用途を想定することができる。

2 中原4号墳出土の玉の時期的位置

続いて、それぞれの玉の特徴から、時期的位置づけについて確認しておく。

(1) 瑪瑙製勾玉

瑪瑙製の勾玉は12点が出土している。このうち4～14はB-N群、15はB-S群から出土している。瑪瑙という素材、鉄針による片面穿孔という製作の特徴から、いずれも典型的な山陰系の玉と判断される（註5）。

山陰系の瑪瑙製勾玉は、日本列島に広域的に分布する。前V期に登場し、以後、後期に至るまで流通が認められる。特に生産、消費の量が増大する後期において製作される勾玉は、前期に比べ、最終研磨が粗雑で平滑さに欠け、また、平面形についても滑らかな曲線を描く「C」字形ではなく、角ばった「コ」字形を呈する。特に後Ⅱ期以降は、「全長／幅」の指数が1.70を超える縦長化が顕著になったり、セット内での指数の変異が大きくなったりする。こうした特徴は、山陰系の碧玉製勾玉や水晶製勾玉にも認められる傾向である（大賀2009）。

中原4号墳の瑪瑙製勾玉については、いずれも平面形が「コ」字形を呈し、指数が1.59～1.79であることから、後Ⅱ期以降に位置付けることができる。

(2) 碧玉製管玉

碧玉製の管玉は22点が出土している。16～17の2点はB-NE群、18～19の2点はB-N群、20～37の18点はB-S群から出土している。石材は、17、36、37以外はいずれも硬質で濃緑色の、花仙山産碧玉と推定される。17はやや灰色味のある緑色、36、37はやや淡い青緑色であるが、同じく花仙山産碧玉の範疇と推定される。さらに、21、36が鉄針による両面穿孔であるが、このほかはいずれも鉄針による片面穿孔である、という特徴もあわせ、典型的な山陰系の玉と判断される。

山陰系の碧玉製管玉は、日本列島に広域的に分布する。弥生時代に登場し、中期後半に断絶するが、その後、後Ⅰ～Ⅱ期に再び生産、流通が認められるようになる。特

に後期の玉は、全長と径の比率が3:1となる規格性の強いものとなり、さらに鉄針による片面穿孔が顕著となる(大賀 2009、米田 2009)。

中原 4 号墳の碧玉製管玉は、いずれも全長と幅の比がほぼ3:1であり、一部を除いて片面穿孔であることから、後Ⅰ～Ⅱ期ないしこれ以降に位置づけることができる。

(3) 水晶製切子玉

水晶製の切子玉は24点が出土している。38～60はB-N群、61はB-S群から出土している。水晶という素材、鉄針による片面穿孔という製作の特徴から、いずれも典型的な山陰系の玉と判断される。

山陰系の水晶製切子玉は、日本列島に広域的に分布する。後Ⅱ期後半以降に製作され、後Ⅳ期後半まで続くことが知られている。また、後Ⅱ期は長さ25mm以下にほぼ限定される一方で、後Ⅳ期にかけて長さ40mmを超えるような大型品が出現する(大賀 2009)。

中原 4 号墳出土の水晶製切子玉は、長さ11.90～17.70mmであり、後Ⅱ～Ⅲ期ないしこれ以降の資料と捉えることができる。

(4) 琥珀製棗玉

琥珀製の棗玉は5点が出土している。このうち、出土地点が明らかで、図化しえたものは3点である。62はB-S群、63・64はB-N群から出土している。

琥珀製棗玉は、前期から見られるが、後期を最盛期として流通する。日本列島で広域的に出土するが、後Ⅱ期までは畿内以西を中心とする一方、後Ⅲ期以降は東海以東で多く出土する。水晶製切子玉同様、時期が下るほど大型化し、前期は全長10mm以下を中心とするものが、後Ⅱ～Ⅲ期には10～30mm、後Ⅳ期以降はさらに大型化する(齊藤 2008)(註6)。

中原 4 号墳出土の資料は、長さ12.70～16.20mmであり、後Ⅱ～Ⅲ期ないしこれ以降の資料である可能性が高い。

(5) 土製棗玉

土製の棗玉は2点が出土している。いずれもA群から出土している。

土製棗玉は、出土事例がそれほど多くなく、具体的な研究も進んでいない。しばしば土製丸玉と共伴することや、外表面に煤等を付着したようなにぶい灰色を呈するなどの特徴から、両者が同じ場所で製作された可能性は

ある。東海地方での出土事例は、尻矢 4 号墳(三重県、後Ⅲ期)の5点、船来山 29 号墳(岐阜県、後Ⅱ期)の11点、高尾向山 7 号墳(静岡県、後Ⅳ期)の5点、土橋 4 号墳(静岡県、後Ⅲ期)の5点などが挙げられる。

(6) 翡翠製棗玉

翡翠製棗玉は、B-S群より1点が出土している。翡翠製棗玉は、前期を中心に流通する。しばしば綾杉紋を持ち、前期の翡翠製勾玉に共伴する(大賀 2002a)が、中原 4 号墳出土資料には綾杉紋、翡翠製勾玉とも伴わない。前期に流通したものが、伝世等、何らかの形で含まれたものと考えられる。

(7) 碧玉製丸玉

碧玉製とみられる丸玉が、B-S群より1点出土している。形状は円筒形で、次に述べる白玉に似ている。類例が不詳であり、流通の範囲や時期についても不明である。

(8) 滑石製白玉

滑石製の白玉は7点が出土している。いずれもB-S群から出土している。

滑石製白玉は、前期後半から後期を通して確認される。中期を中心に、多ければ数千点から1万点を超える出土も珍しくない。一方、後期になるとこのような多量副葬は少なくなり、東海地方では少なれば数点、多くても大城 5 号墳(三重県、後Ⅲ期)の63点、船来山 264 号墳(岐阜県、後Ⅱ期)の52点にとどまる。また、地域ごとに若干の多寡があるようである(戸根 2008)。

なお、滑石製白玉の中でもいくつかの系へ分化される可能性があるものの、現状では未分化であり、詳細な時期比定も困難である。

(9) 土製丸玉

土製の丸玉は115点が出土している。いずれもA群から出土しており、このうち5点は、須恵器内から出土している。前節のとおり、径8.0mm前後、径6.5mm前後の2群にわけられることもできるが、径5.55～8.95mm、長さ5.10～8.20mmに凝集する。また、外表面はいずれもやや光沢のある黒色で、漆等を付着しているものと考えられる。

土製丸玉は、後期になると、中期の滑石製白玉に替わるように流通するようになる(大賀 2002a)。東海地方では、後Ⅰ期の船来山 145 号墳の365点が最初期のまとまった出土例であるが、地域ごとの偏りもある。この点については次項でも詳しく検討していく。

(10) ガラス製小玉

ガラス製の小玉は232点以上が出土している。このうち、186～386、415の202点はB-S群、387～414、416、417の30点はB-N群から出土している。今回は、科学分析も実施しているので、田村朋美による本書別稿（本書第4章第4節）を参照いただきたいが、ここではその結果を引用しておく。

肉眼観察では、鋳型法による資料が40点あり、そのほかの192点は引き伸ばし技法による資料である。このうち、引き伸ばし技法による資料の内訳は、ソーダガラスが174点で、このうちGroupSIIが127点、SIIIが45点、SIVが2点である。SIIはさらに着色剤・発色によって細分可能である。カリガラスは5点で、いずれもGroupPIである。このほか、判断保留とされたものが4点、未分析資料が5点ある。細分類も含め、内訳は第13表のとおり示す。

時期的位置づけは、GroupSIIBが4～6世紀、SIIIBが5～6世紀、SIVが2～5世紀、PIが紀元前3～紀元後5世紀であり、中原4号墳出土の大半の資料が6世紀までに捉えられる。GroupSIVやPIは若干数であり、出土状況も特に他の玉と差がないことから、副葬されるまでの間に何らかの形で混入したことが推定される。

(11) 小 結

以上、中原4号墳出土の玉の特徴を概観してきた。翡翠製環玉や一部のガラス小玉など、古い様相の資料も含まれるが、他の資料からは後Ⅱ期後半以降の資料と位置付けることができる。また、後Ⅳ期以降に特徴的な玉を伴わないことから、後Ⅲ期までの範疇に収まる可能性が高い。この点については、A群、B群出土の他の資料の年代観とも符合している。

なお、群ないし環ごとの時期差は積極的には認められ

なかった。基本的に原位置を保っていると推定されることも踏まえると、それぞれ同時期ないしごく短い期間に副葬されたものと考えられる。

3 中原4号墳出土の丸玉・白玉・小玉の組成

続いて、流通圏に特徴が認められる丸玉、白玉、小玉について、周辺地域の様相を概観し、中原4号墳の特徴を明らかにしたい。

後期における丸玉、白玉、小玉の材質は、瑪瑙、碧玉、水晶、滑石、蛇紋岩、土、翡翠、琥珀、金属、ガラスがあげられる。この中でもガラスが圧倒的多数を占め、一括して検討すると、他の素材の特徴を捉えにくくなってしまう。そこで、ガラス以外を素材とした丸玉・白玉とガラスを素材とした小玉とをそれぞれ検討する。

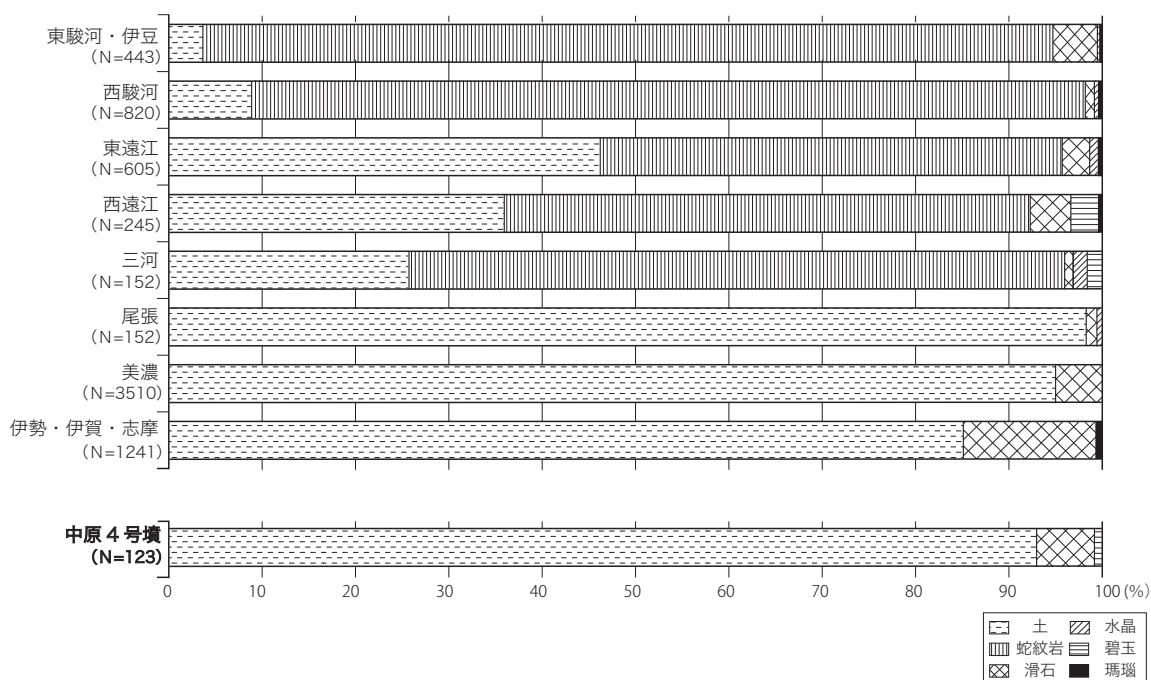
(1) 丸玉・白玉の材質組成と特徴

後期になると、これらの玉は、中期までに多量に生産、副葬された滑石製白玉が激減し、替わってガラス製小玉や土製丸玉が多く出土するようになる。一方、東海地方においては、土製丸玉よりも「東海系」と呼ばれる蛇紋岩製丸玉が流通する（大賀2002a）。東海系の蛇紋岩製丸玉は、特に中原古墳群の所在する東駿河を中心に、西は三河まで流通が認められるが、これより西には広がらない（戸根2008）。ところが、中原4号墳では各種の玉が出土しているにも関わらず、蛇紋岩製丸玉は出土していない。

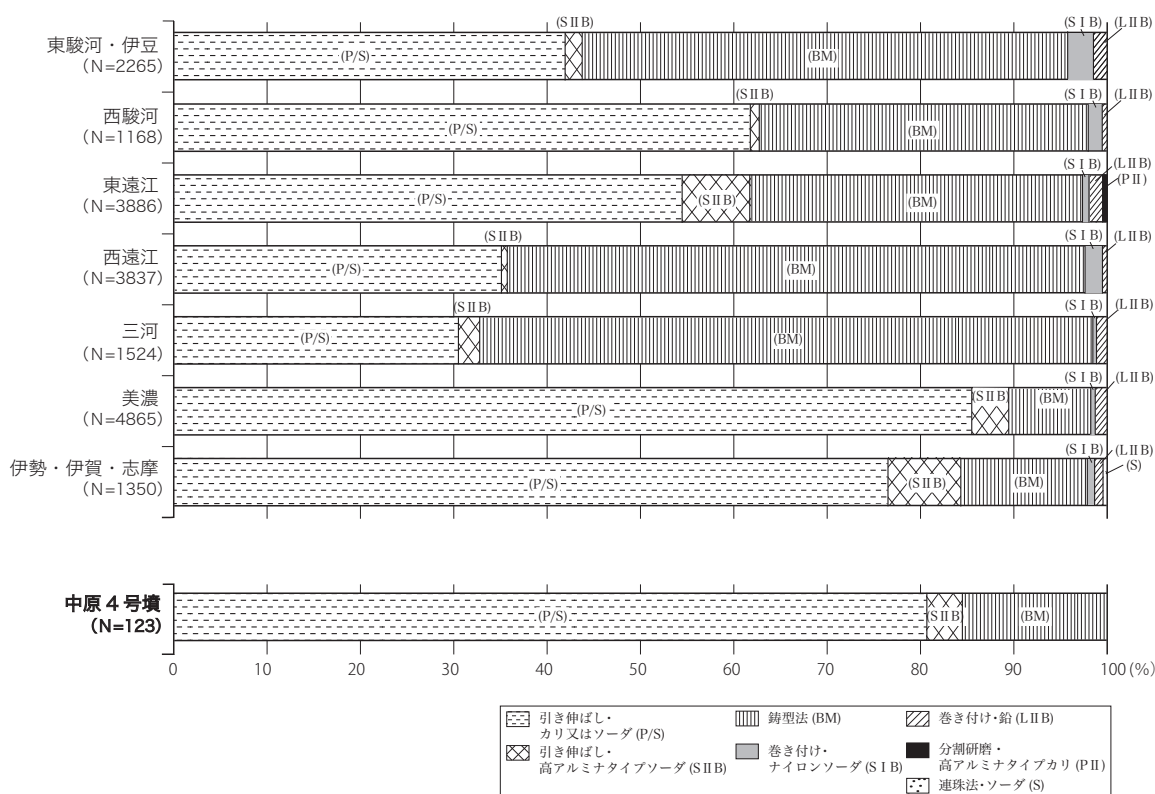
こうした状況を踏まえ、東海地方における地域別の丸玉・白玉の材質組成を確認していく。第183図に示すとおり、母数にややばらつきはあるものの、いくつかの特徴を知ることができる。まず、先行研究のとおり、三河以東に東海系の玉である蛇紋岩製丸玉が見られること。この割合は少なくとも5割、多ければ9割近くを占め、丸玉・白玉の主体を占めていることがわかる。反対に、尾張以西においては、土製丸玉が主体を占め、その割合は8～9割にのぼる。土製丸玉は三河以東においても一定量が出土しているが、三河と遠江においては3～4割を占めている一方で、さらに東方の駿河においては1割に満たない。また、土製丸玉、蛇紋岩製丸玉に次いで出土量の多いのが滑石製白玉である。土製丸玉と蛇紋岩製丸玉の量に圧倒され、あまり存在感がないが、伊勢地域では1割を超える出土量であることも注目される。

第13表 ガラス製小玉の分類別数量一覧

製作技法	材質	分類	着色剤	色調・透明度	B-S群	B-N群	合計
鋳型法				紺色透明	40	0	40
引き伸ばし	カリ	PI	コバルト	紺色透明	4	5	9
引き伸ばし	ソーダ	SII	錫	黄色不透明	5	0	5
引き伸ばし	ソーダ	SII	鉄	黒色不透明	1	0	1
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅	淡青色透明	33	0	33
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅	淡青緑色透明	1	0	1
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅、錫	黄緑色半透明	2	0	2
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅、マンガン	濃青色透明	19	1	20
引き伸ばし	ソーダ	SII	銅、マンガン	濃青色透明(暗)	65	0	65
引き伸ばし	ソーダ	SIII	コバルト	紺色透明	25	20	45
引き伸ばし	ソーダ	SIV	コバルト	紺色透明	1	1	2
引き伸ばし		保留			1	3	4
引き伸ばし		未調査			5	0	5
合 計					202	30	232



第 183 図 丸玉・白玉の地域別材質組成



第 184 図 ガラス製小玉の地域別材質組成

続いて、中原4号墳出土丸玉類の材質組成を確認すると、土製丸玉が9割以上、滑石製白玉が1割弱となり、蛇紋岩製丸玉は含まれない。この組成は、中原4号墳の所在する東駿河の様相とは異なり、尾張以西の特徴に非常に似通っていることが指摘できるのである。

(2) ガラス製小玉の製作技法・材質法組成の特徴

ガラス製小玉は、肉眼観察からは、製作技法、色調（色味）・透明度、法量等について判別できる。材質の化学分析の蓄積によって、こうした肉眼観察の結果と、実際の材質との対照がある程度可能となっているが、一方で青色系のガラス製小玉は色調がバリエーションに富むと同時に、材質も多様である（註7）。ここでは特に製作技法に着目し、材質については明らかなものについて併記するにとどめ、検討を進めることとしたい。

ガラス製小玉の製作技法は、引き伸ばし技法、変則的引き伸ばし技法、巻き付け法、包み巻き法、連珠法、加熱貫入法、管切法、鋳型法、分割研磨法、融着法が知られている（Oga and Tamura 2013）。このうち、東海地方において実見したガラス製小玉で確認できた製作技法は、引き伸ばし技法（変則的引き伸ばし技法を含む）、巻き付け法、連珠法、鋳型法、分割研磨法である。さらに色調や透明度といった観察所見を踏まえると、巻き付け技法は鉛ガラス（GroupLIIB）又はナトロンタイプのソーダガラス（SIB）、連珠法はソーダガラス（S）、分割研磨法は高アルミナタイプのカリガラス（PII）の可能性が高い。鋳型法は、各種ガラスを原料として二次的に再生していることが推定され、ガラスの材質を一概に決めることは難しい。また、引き伸ばし技法のガラス製小玉は、カリガラス（P）又はソーダガラス（S）のいずれかに帰属する。このうち、SIIBに分類される資料の一部は、不透明な赤色、黄色、緑色など特徴的な色調を呈する高アルミナタイプのソーダガラスである。

以上を踏まえ、ここでは、巻き付け技法・鉛ガラス（GroupLIIB）、巻き付け技法・ナトロンタイプのソーダガラス（SIB）、連珠法・ソーダガラス（S）、分割研磨法・高アルミナタイプのカリガラス（PII）、鋳型法（BM）、引き伸ばし技法・カリ又はソーダガラス（P/S）、引き伸ばし技法・高アルミナタイプのソーダガラス（SIIB）（註8）、として、それぞれについて、地域ごとの割合を確認していく。第184図のとおり母数にばらつきはあるが、いくつかの特徴を知ることができる。まず、三

河以東では鋳型法（BM）の割合が、少なくとも3割、多ければ6割以上を占めることがあげられる。反対に、尾張以西においては、引き伸ばし技法・カリ又はソーダガラス（P/S）が主体を占め、8～9割にのぼる。また、数量は決して多くないが、西遠江以東でGroupSIBが一定量ある（33～92個）のに対し、三河以西では僅少（5～24個）であることも傾向として捉えることができる。

続いて、中原4号墳出土のガラス製小玉について、製作技法別の組成を確認すると、引き伸ばし技法（P/S）が8割以上、鋳型法（BM）は2割弱にとどまる。また、GroupSIBも出土していない。この組成は、中原4号墳の所在する東駿河の様相とは異なり、尾張以西の特徴に似通っている。

(3) 小 結

以上のとおり、東海地方における地域別の検討により、中原4号墳出土の玉の組成が特徴的であることが確認された。具体的には、蛇紋岩製の玉が出土しないこと、土製丸玉を多く含むこと、滑石製白玉を含むこと、また、鋳型法によるガラス製小玉の占める割合が低いことなどが明らかとなった。こうした特徴は、東遠江を含む三河以東の様相ではなく、尾張以西の特徴に近い、ということも確認された。

4 中原4号墳出土の玉の意義

前項のとおり、中原4号墳出土の玉は、近隣地域である三河、遠江、駿河の様相とは異なり、尾張以西の様相に類似することが明らかとなった。この背景と意義について、さらに考察を進めておきたい。

はじめに、東海地方における玉の材質組成の特徴から、その生産地について考えてみたい。蛇紋岩製の玉は、これまで生産地が発見されていない。しかし、その消費地の分布状況は明らかに偏っており、三河以東のどこかに生産地が存在していた可能性が高いと言えよう。また、この時期のガラス製小玉は、基本的には舶載品に限定されていた一方で、鋳型を用いた小玉の生産は国内でも行われていた。鋳型は、中・後期に限れば布留遺跡（奈良県）、部屋北遺跡（大阪府）、難波宮跡（大阪府）、大泉南遺跡群（大阪府）など畿内を中心に出土しているが、前期に遡れば西新町遺跡（福岡県）、豊島馬場遺跡（東京都）、川戸下遺跡（千葉県）、鶴ヶ岡1号墳（千葉県）など各地で出土していることがわかっていく（田中2007）。

ただし、事例が十分蓄積されているとはいいがたく、また、消費地側の検討も不十分であり、現状では生産地と消費地を単純に結びつけることは難しい。しかし、消費地に偏りがあることは事実であり、生産地と消費地のつながりが密接であった可能性は十分ありえる。その意味でも、東海地方においても、例えば静岡県沼津市の中原遺跡から鋳型が出土していることは示唆的である。さらに、同じく生産地が不詳である土製丸玉や滑石製白玉についても、地域の偏在性を考慮すれば、同様の現象を説明できるであろう。

このように生産地と消費地の関係を仮定すると、地域性の高い玉の有無は、そのままその被葬者がその地域と密接なつながりがあるか否かと結びつくことになる。すなわち、中原4号墳の被葬者は尾張以西の勢力と密接なつながりを持っていた、と推定することができるのである。反対に、蛇紋岩製の丸玉を持たず、鋳型によるガラス製小玉の割合が低いことは、在地勢力との関係の希薄さを示すのであろう。

さらにもう一步踏み込むならば、こうした地域性の高い玉が、どのような時代背景の中で生産されるようになったかによって、その意味合いも大きく変わってくる。例えば、あくまでも地域性の低い玉、広域に流通する玉の代替品なのであれば、それを入手できない、入手が難しいことの裏返しであり、広域流通品に対する権力の弱さを示すことになるが、地域の結束の象徴として生産が開始したのであれば、その有無が地域の中での力の強弱を示し得る。この点については、より広域での玉流通の検討や、同時代の他の遺物の地域性との関り等も踏まえた検討を進める中で明らかにできるかもしれない。

いずれにしても、中原4号墳の被葬者については、少なくとも在地勢力というよりは、尾張以西の勢力とのつながりが強かったことを、出土した玉の特徴から捉えることができるだろう。

5 まとめ

本稿では、中原4号墳出土の玉を通して、時期的位置づけ、組成の特徴を概観し、さらにその背景について考察した。最後に今一度まとめるとともに、今後の課題を述べておく。

出土状況については、大きく2群、細分すると4群に分けることができた。その組成や環の検討により、こ

れらが基本的に原位置を保っていることや、その用途についても祭祀的用途、頭飾り、首飾り等と推定した。

時期的位置づけについては、水晶製切子玉、琥珀製棗玉の大型化が認められないこと、瑪瑙製勾玉や碧玉製管玉の形状の特徴から、後Ⅱ～Ⅲ期の可能性が高い。この点については、一部、翡翠製棗玉など明らかに時期の異なる玉を除けば、他の玉についても矛盾せず、また他の副葬品の年代観とも符合する。一方で、上記2群（細別4群）間における時期差は積極的に認めることはできず、これらの玉は同時あるいは極めて近い時期に副葬されたものと推定した。

組成の特徴は、特に地域色が明らかとなる丸玉、白玉、小玉に着目し、蛇紋岩製の玉が出土しないこと、土製丸玉を多く含むこと、滑石製白玉を含むこと、ガラス製小玉のうち鋳型法による小玉の占める割合が低いこと、などが明らかとなった。こうした特徴は、周辺地域とは異なり、東海地方の中でも尾張以西と共通する。その背景として、中原4号墳の被葬者が、尾張以西の勢力とのつながりが強かったことを推定した。

なお、今回、ガラス製小玉についての科学分析を実施しているが、他遺跡の出土資料については肉眼観察による検討にとどまっている。科学分析の結果が蓄積されることを待ちつつ、肉眼観察でも進めるべき課題は残されており、より詳細な観察を通して行うべき議論の余地もあろう。

また、中原4号墳の被葬者とつながりを持つと推定した尾張以西の勢力については、当然畿内勢力を視野に入れてはいるが、今回、明確な根拠を示す資料を提示することはできなかった。今後、土製丸玉や滑石製白玉の適切な分類により、それぞれの偏在性を確認する中でより具体的になるだろう。

いずれにしても、東海地方という限られた地域であるが、これまで十分な議論がなされてこなかった玉の動向を明らかにし、これを元に一古墳の特徴と意義について一定の見解をえることができた。本稿を機に議論が深化すれば幸いである。

【謝辞】

資料見学に際しては、下記の諸機関に便宜を図っていただきました。記してお礼申し上げます。

磐田市埋蔵文化財センター、岡崎市教育委員会、各務原市埋蔵文化財調査センター、掛川市教育委員会、可児市教育委員会、亀山市歴史博物館、菊川市教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、静岡市立登呂博物館、静岡市埋蔵文化財センター、島田市博物館、市民ミュージアム浜北、津市埋蔵文化財センター、豊川市教育委員会、豊田市郷土資料館、豊橋市美術博物館、名古屋市博物館、沼津市教育委員会、浜松市博物館、袋井市教育委員会、藤枝市郷土博物館、富士川町教育委員会、富士市立博物館、三重県埋蔵文化財センター、三島市教育委員会、本巣市教育委員会、森町教育委員会（50音順）

註

1 時期区分の概要は次のとおり。

大賀 2002b	和田編年	広瀬編年	須恵器
後Ⅰ期	九	8	TK23 TK47
後Ⅱ期	十	9	MT15 TK10
後Ⅲ期	十一	10	TK43
後Ⅳ期			TK209 TK217

2 地域区分の概要は次のとおりである。

伊勢 旧伊勢、伊賀、志摩国を総称する。

美濃・尾張・三河 それぞれ旧美濃国、尾張国、三河国を指す。

西遠江 旧遠江国のうち天竜川以西とする。

東遠江 旧遠江国のうち天竜川以東とする。

西駿河 旧駿河国のうち富士川以西とする。

東駿河 旧駿河国のうち富士川以東及び旧伊豆国を総称する。

なお現富士市、富士宮市は便宜上東駿河に含める。

3 球形の玉については大玉、丸玉、小玉、粟玉等の呼称があるが、便宜上、石製の玉を丸玉、ガラス製の玉を小玉とする。

4 各群の玉について、孔の軸方向の長さ（勾玉以外）ないし厚さ（勾玉）を合計して求めた。

5 13、14 は、特に白色系の石材を採用していることや、全長に対する幅の比率（全長／幅≒1.60）が大きいことなどから、非山陰系の可能性もある。

6 齊藤 2008 では、前期の全長が10mm以下を中心とすることには触れているが、大型化の度合いを具体的な数値では示していない。ここでは、上記文献掲載のグラフから、筆者が読み取った。

7 たとえば、引き伸ばし技法による「紺色・透明」で「径3～4mm」に該当する資料は、カリガラスのPI、ソーダガラスのSII、SIIIの可能性があり、即断が困難である。

8 観察所見が特徴的であるGroupSIIBを抽出しているが、これがSIIB全てを示すわけではなく、一部の資料は「P/S」の中に含まれている。

主要参考文献

- 大賀 克彦 2002a「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館 pp.313-320
- 大賀 克彦 2002b「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V） 福井県清水町教育委員会 pp.1-20
- 大賀 克彦 2002c「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V） 福井県清水町教育委員会 pp.1-20
- 大賀 克彦 2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター pp.9-62
- 齊藤 あや 2008 「古墳時代後期における琥珀製玉の再検討—地域的偏在と大型化—」『史叢』第78号 日本大学史学会 pp.199-218
- 田中 清美 2007 「『たこ焼き型鋳型』によるガラス小玉の生産」『研究紀要』第6号 大阪歴史博物館 pp.1-24
- 田村 朋美 2015 「引き伸ばし法によるガラス小玉の系譜と伝播」『物質文化』第95集 pp.19-32
- 戸根 比呂子 2008 「『東海系』の玉の流通」『玉文化』第5号 日本玉文化研究会 pp.45-64
- 廣瀬 時習 1996 「弥生・古墳時代の玉の使用形態と意義—玉副葬の歴史的展開—」『文化史学』第52号 文化史学会 pp.1-23
- 米田 克彦 2009「穿孔技術からみた出雲玉作の特質と系譜」『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター pp.93-126
- Oga Katsuhiko and Tamura Tomomi 2013 Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere : Cemical Compositions,Chronologies and Trade Routes of Imported Glass Beads in the Yayoi-Kofun Periods (3rd century BCE-7th Century CE) ,Japan of Indian Ocean Archaeology No.9,pp.35-65

※都合により遺跡報告書については割愛させていただきます。

図表出典

- 第177図 富士市教育委員会作成、筆者加筆。
- 第178～184図 筆者作成。
- 第12～13表 筆者作成。